

主語の階層的位置とその A/A' 特性について

柳澤國雄

1. 導入

主語としての A 特性に加え、wh 句としての A' 特性をも併せ持つ主語 wh 句の占める位置の分析には、多くの提案がなされ実証的検討が重ねられている。A 位置である TP 指定部を経由して A' 位置である CP 指定部へと移動する派生(1a)が一般に想定されているが、空移動仮説や Chomsky (2013, 2015) のラベル付け理論の議論などを受け、TP 指定部に留まる派生(1b) や TP 指定部を経由せず CP 指定部へ一足飛びに移動する派生(1c) もまた支持されている。

- (1) a. [CP *who* C [TP *t* T [_{vP} *t left*]]]
 b. [CP C [TP *who* T [_{vP} *t left*]]]
 c. [CP *who* C [TP T [_{vP} *t left*]]]

他方、Bošković (2024)は CP と TP の中間に位置する混合的な A/A' 特性を持つ投射 A/A'P が存在し、主語 wh 句はそこに着地すると提案している。本論では、従来の A・A' の二分法によらないこの中間的機能投射 A/A'P は、ラベル付け理論の枠組みから導出可能な派生的概念であることを示す。

2. A/A'位置である A/A'P (Bošković (2024))

Bošković (2024)は多くの経験的証拠に基づいて(1)の派生を退け、代わりに、wh 主語が A/AP に、通常主語が AgrSP に位置する分離 IP(2)を主張している。

- (2) [CP *wh*-phrase C [A/A' *wh*-subject A/A' [AgS_P *subject* AgS [TP T [VP ...

wh 主語が他の wh 句よりも構造上低い位置にあることを支持する一例として、wh 目的語(3a)は話題化要素に先行可能である一方で wh 主語(3b)では非文となるという語順の対比が挙げられる。

- (3) a. ?Mary wonders which book, for Kim, Peter should buy.
b. *Mary wonders which student, for Kim, should buy that book.

(Bošković (2024: 13))

また、wh 主語が通常主語と同じ位置を占めないことは、目的語数量詞との作用域関係における非対称性などに見て取れる。通常主語(4a)は逆作用域が可能である一方で wh 主語(4b)では不可能であるという事実が、両者の階層的位置の違いを示している。

- (4) a. Someone likes everyone. inverse scope OK
 b. Who likes everyone? *inverse scope (Bošković (2024: 24))

さらに、等位接続構造(5)における制約が、A 位置 AgrSP と時制句 TP の分離の必要性を示唆する。従来の非分離 IP 構造(5a)においては許容されない中間投射 I' 同士の等位接続が生じるのに対し、分離 IP 構造(5b)は助動詞を含む最大投射 TP 同士の等位接続を可能とする派生を与えることから、後者の妥当性が認められる。

- (5) John [travels to Rome tomorrow] and [will fly for Paris on Sunday]. (Bošković (2024: 25))

 - a. *[_{IP} John [_{I'} travels to Rome tomorrow] and [_{I'} will fly for Paris on Sunday]]]
 - b. [_{AgSP} John [_{TP} travels to Rome tomorrow] and [_{TP} will fly for Paris on Sunday]]]

A/A'P 分析は、 ϕ 素性と一つの A' 素性を持つ混合的投射を仮定することで従来の A・A' の二分法的分析では捉えきれない振舞いを統一的に説明することに成功している。しかしながら、なぜある投射が A 特性と A' 特性を同時に持ち得るのかそのメカニズムは明示的に示されていない。

3. 試案

本論では A/A'P を含む階層構造をラベル付け理論から導出することを試みる。具体的には、分離 IP（ここでは、A と A' の混合位置である A/A'P と純粹な A 位置である AgrSP）は独立した投射ではなく、C からの素性継承によって派生的に生じる位置であり、その位置の A・A' 特性はラベル付けアルゴリズムにおける素性共有によって決定されると論じる。

素性未指定の主要部 δ へ素性継承が行われる (Branigan (2020)) 派生を採用し、C 主要部の導入後に δ の移動要素 XP に対応する素性が継承され、素性共有によるラベル付けが行われる派生(6)を仮定する。

- (6) a. $[\gamma C_{[F]} [\beta XP_{[F]} \delta_{[\alpha T \dots]}]]$ Feature Inheritance
b. $[\gamma C [\beta XP_{[F]} \delta_{[F]} [\alpha T \dots]]]$ Labeling: $\beta = <F, F>$

移動要素と素性継承の組合せ(7a-c)により A 位置、A/A' 位置、A' 位置が生じる。これにより、(2b)の階層構造が素性継承とラベル付けから原理的に導出される。

- (7) a. $[\gamma C [\beta DP_{[\phi]} \delta_{[\phi]} [\alpha T \dots]]]$ Pure A positions: $\beta = <\phi, \phi>$
b. $[\gamma C [\beta DP_{[\phi], [A']} \delta_{[\phi], [A']} [\alpha T \dots]]]$ Mixed A/A' positions: $\beta = <\phi, \phi>/<A', A'>$
c. $[\gamma C [\beta_2 XP_{[A']} \delta_{[A']} [\beta_1 DP_{[\phi]} \delta_{[\phi]} [\alpha T \dots]]]]$ Pure A' positions: $\beta_2 = <A', A'>$

しかしながら、A/A' 分析が階層的位置に加えて捉えようとした、主語位置の EPP 特性を本論のメカニズムで包摂しきれるかは今後の課題として残る。Bošković (2024) は分離 IP 領域の最上位に位置する句が EPP を満たすと主張しており、場所句倒置構文(8b)の場所句のような非主語要素も A/A'P を占めると分析している。

- (8) a. An elegant fountain stands in the Italian garden.
b. In the Italian garden stands an elegant fountain.
c. In which garden stands a fountain? (Langendoen (1973: 28, 32))

本論の試案では、 ϕ 素性を持たない場所句は A/A'P 位置としての派生(7b)を許容しない。さらに、疑問化した倒置場所句(8c)については、wh 移動した純粹な A' 要素が A/A'P の EPP 特性を満たしうる位置にあるのか疑問である上、仮に A/A'P に位置するとすれば場所句倒置由来の A' 素性と wh 素性という 2 つの A' 素性を持つことになり、Bošković による A/A'P の定義（単一の A' 素性）との整合性という点で、説明はより困難となる。このことから、主語位置の統語的特性と EPP の関係を統一的に捉える分析の構築は、本論の試案の精緻化とともに、今後さらなる検討を要する。

4.まとめ

本論では従来の A・A' の二分法によらない A/A' 混合位置を素性継承とラベル付け理論からの導出を試み、Bošković (2024) が経験的に提示した A/A'P の階層構造が原理的に説明されうることを示した。

参考文献

- Bošković, Željko (2024) “On Wh and Subject Positions, the EPP, and Contextuality of Syntax,” *The Linguistic Review* 41, 7–58.
- Branigan, Phil (2020) “Multiple Feature Inheritance and the Phase Structure of the Left Periphery,” *Rethinking Verb Second*, ed. by Rebecca Woods and Sam Wolfe, 150–176, Oxford University.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- Langendoen, D. Terence (1973) “The Problem of Grammatical Relations in Surface Structure,” *GURT 1973: Language and International Studies*, 27–37, Georgetown University Press.